4．慢性副鼻腔炎に対する各種薬剤によるネブライザー療法の検討
——リゾチームならびにチァンフェニコール混合液による治験成績——

古田　茂、昇　卓夫、嘉川須美二、柳井谷巧
前山拓夫、大山　勝（鹿児島大）

鼻副鼻腔炎に対する保存的療法として、ネブライザー療法はすでに広く用いられ、それに関する優れた研究報告は少なくない。

今回、われわれは、1978年8月より1979年7月までの1年間に鹿児島大学およびその関連病院において、慢性副鼻腔炎症例に対する2～3の薬剤の単独ないしは併用ネブライザー療法を試み、それらの臨床効果を比較検討した。その結果、これらの薬剤が慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法の一つとして有用と考えたので報告した。

〔薬剤および投与方法〕：試験薬剤として、3％ Lysozyme液（B群）と5％ Thiamphenicol＋B液（C群）である。比較対照薬として生理食塩水（A群）を使用した。これら3種の薬剤のいずれかをdouble blindの形で使用し、原則として週4回以上、4週間ネブライザーをした。投与量は各1 mlとし、key codeの開票は治験終了後とした。併用薬剤は治験に影響を及ぼす可能性のある薬剤は可及的にさけた。

〔調査項目および効果判定〕：調査項目は自覚的所見として、鼻閉、鼻漏、後鼻漏、頭重感の4項目を、他覚的所見として、粘膜腫張、鼻漏、後鼻漏、粘膜発赤、X線所見の5項目について検討した。各項目の調査は、使用前、使用後2週および4週目の3回施行した。ただし、X線所見の検索は原則として使用前と使用後4週目の2回行った。効果判定は重症度を4段階に分類し、使用前、使用後2週および4週後のそれをそれぞれ比較検討した。改善度は点数で表現し、1段階の改善に対して1点を与え各項目について調査した。さらに、総合判定として、4週後に5段階に別けて再評価をした。

〔研究成績〕：4週後まで調査しえた症例はA群17例、B群27例、C群24例の計68例である。年令分布は4才より78才と広範囲におよび、性別では男34例、女34例と同数である。

自覚的所見の改善度に関しては、4項目のいずれにおいても3群間に有意差を認めない。

他覚的所見では、X線所見において、B・C群がA群に対してともに有意に優れた成績を示した。また、粘膜腫脹においても、4週後でB・C両群がA群より有意に優れた結果を得た。しかし、他の3項目については有意差は認めなかった。

全般改善度についての総合判定の結果を軽度改善以上の改善群と不変・悪化の非改善群に2大別して検討すると、改善率ではA群41％、B群73％、C群93％とC群、B群、A群の順でより成績が得られた。また、統計学的にも有意差が認められた。副作用の発現をみたものはなく、ネブライザー療法中に不快感等を訴えた症例も認めなかった。

〔考　按〕：慢性副鼻腔炎の治療において、今日ネブライザー療法は広く用いられ、その有用性についての報告もみられる。しかし、その薬剤の選択や用量については、必ずしも合理的な結論に達していないのが現状であろう。

今回、われわれが治験を行なった薬剤は前述の如く、臨床的にかなり高い有用性が窺われた。加えて、難治性の症例に対しては、セファランチン液を混合して良好な結果を得た、Lysozymeは局所投与においても経口投与同様著効が期待され、その作用機序より、本症に対する理想的な薬剤であろう。また、Thiamphenicolは

広範囲スペクトルをもち、かつ近年 Chloram phenicol を使用する機会が激減したことより、first choice の薬剤としてかなり有効であるといえる。Cepharanthin は網内系の賦活作用や抗アレルギー作用をもち、小児副鼻腔炎にも有効との報告があり、今回の有効例が小児例であったことは、過去の報告とも一致しており興味深い。

いずれにしても、慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法に際しては、今後、薬剤の選択、そして、それらの適当な組み合わせを考え、病態に最もかなった合理的な治療が行なえるように努力しなければならないと考えている。